

多田雅彦 『CSR（企業の社会的責任）の本質からはずれた CSR』

【研究テーマについて】

CSR の本質とは何か。なんとも深く難しい問いですが、筆者の多田さんはこの問いに正面から立ち向かいました。この勇気だけでもじつにたいしたものです。

筆者は、CSR の本質について、「企業の利潤追求や企業価値向上以外の社会目的」つまり「奉仕」という考え方と、企業の利潤追求という考え方を対比させて、前者の考え方を支持しています。具体的には「地球環境の保全、すなわち生物多様性の保護や生態系の維持である」(17 ページ)と述べています。

個人的には、「社会目的」が環境問題に全て集約されるとは思いませんが、それはともかくとして、CSR の本質は「社会目的」(= 公益)にあるのか、それとも企業利益(= 私益)にあるのかというテーマは、CSR が表面的な理解で流行している現在において、きわめて重要な問題提起だと考えられます。CSR 論は、公益と私益が両立し得ると説くわけですが、はたして本当に両立しているのでしょうか。

この論文のテーマは、「企業は CSR を企業のイメージアップのために利用しているのではないか」という問題意識を出発点としていますが、これは筆者のみならず、実際多くの人がうすうす疑問に感じていることであり、企業に対する不信感の源にもなっているのではないのでしょうか。とりわけ、表面的には社会貢献活動で「良い企業」を世間にアピールしながら、裏で悪事をはたらくような企業に対して、そのような疑問が出てきます。

むろん、企業は利益追求の組織ですから、私益そのものを否定するわけにはいかないけれども、私益を優先するあまり公益を犠牲にするような反社会的行為をどうしたら効果的に防げるのか、私たちはもっと深く考える必要があると思います。この論文は、青年らしい正義感にあふれるテーマとして、好ましい印象を受けました。

【研究方法について】

CSR (企業社会責任) の概要、歴史的経過、社会的背景などについて、文献を丹念に読んで要領よくまとめました。ステークホルダー、コーポレート・ガバナンス、コンプライアンス、社会的責任投資 (SRI) など、CSR に関連した重要なトピックもほぼ網羅されているところが、この論文の優れた点だと思います。

第 5 章の問題提起で 2 つの事例を紹介していますが、これらの事例だけをもって結論を導こうとするのは、やや性急との印象を受けました。実証しようとするならば、一つの事例にもっと深く分け入ったり、多くの事例を集めることが求められます。

現時点では CSR といってもまだ実感がわかないでしょう。筆者はメーカーへの就職が内定しており、就職先の企業で実際に働きながら、CSR の本質とは何かについて考察を深めていってくれることを切に期待しています。CSR の本質をめぐる問いは、日々の業務のなかにこそ見出されるでしょうし、日常の場面において、公益と私益との間で選択を迫られ、悩みながら答えを模索することになるかもしれませんね。この論文はその出発点です。